KL1

2024年度

国 語 入 試 問 題

（2023年11月19日実施）

座 席 番 号									

［注　意］

1. 試験監督者の指示があるまで，問題冊子や筆記用具に触れてはいけません。触れた場合は，不正行為とみなすことがあります。
2. 試験中の使用が認められたもの以外は，すべてカバンに収納すること。使用用具は，黒芯の鉛筆またはシャープペンシル，消しゴム，鉛筆削り（電動式・大型のもの・ハンドル付のものは不可）とし，それ以外の使用は認めません。
3. **携帯電話，スマートフォン，イヤホン，ウェアラブル端末，電子辞書，ICレコーダーなどの電子機器類は，必ず電源を切ってから，カバンに収納すること。**
4. 試験開始の合図により，試験を始めてください。
5. 解答は，すべて「解答用紙」の所定の欄に記入すること。
6. 試験終了の合図とともに直ちに筆記用具を置くこと。試験終了後に解答用紙や筆記用具に触れた場合は，不正行為とみなすことがあります。試験監督者が指示するまで，絶対に席を立ってはいけません。
7. 問題冊子および解答用紙は，試験終了後にすべて回収するので，**持ち帰ってはいけません。**

問題Ⅰ　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

色の名前や見え方には普遍性があることが明らかになっているのですが、いまだに「日本では虹は七色だが、フランスでは五色、中国では三色」などといった言語相対主義のお話が一般の人々の間ではけっこう信じられているようです。しかし、実際に虹を見ているときに、日本人にはそれが七色に見えるがフランス人には五色に、中国人には三色に見えるなどということはありません。単に、日本では「虹は七色」というフレーズが流通しているだけです。そしてこの「七色」というのは、日本人が虹をよく観察して区分したというよりは、「七草」や「七不思議」、「七福神」などのように慣用句によく使われる数字だから採用されているのだと思われます。

色の名前に人類普遍性があるからといって、ソシュール(注)の恣意性の理論全体が否定されたわけではないとお考えかもしれません。しかし、アメリカの言語学者ノーム・チョムスキー（一九二八～）は、言語は恣意的だという考え方そのものに［A］な批判を加えました。彼は、言語は人間が生まれつき持っている本能だと主張したのです。もちろん、私たちが実際に言語を話せるようになるためには、経験が必要です。しかし、経験だけでは言語を学ぶことはできないとチョムスキーは言います。彼は、一九五七年に最初の著作『統辞構造論』（福井直樹他訳、岩波文庫）を(a)シュッパンして以来、一貫して言語生得説を(b)トナえてきました。

チョムスキー自身は、経験だけでは文法構造を学ぶことができないと主張したのですが、ここでは物の名前を学ぶことを例に挙げて考えてみましょう。

私たちは、子どもに言葉を教えるときに、物を見せてその名前を呼んだりします。たとえば、リンゴを見せて「これはリンゴだよ」と教えます。(1)そのとき子どもは、何がリンゴという名前で呼ばれているのかを自分で理解しなくてはなりません。子どもには、リンゴだけでなく、それを持っている手やお父さんの顔など、さまざまなものが見えています。そのなかのどれが「リンゴ」なのか、どうやったらわかるでしょうか？

指で差してやったらわかるでしょうか。［ア］、指の先には、リンゴだけでなく、赤い色も見えます。赤い色が「リンゴ」なのかもしれません。［イ］、何かが手にのっている状態が「リンゴ」なのかもしれません。ひょっとすると指が「リンゴ」なのかもしれません。「リンゴ」という言葉が何を指しているのかには、無数の可能性があります。何かを見せてその名前を呼んだだけで、その名前が見えているものの中のどれを指しているのかを決定することは、［B］に考えると極めて困難なのです。

もしも子どもたちがこの困難を経験のみによって克服するなら、もっとたくさんの経験が必要なはずです。たとえば、「リンゴ」という言葉一つを学ぶために、リンゴは赤い色でない、手にのっている状態でもない、指でも笑っているお父さんでもない……などと、無数の可能性をすべて検証する必要があります。しかし実際には、たった一回、リンゴを示して「リンゴだよ」と言っただけで、子どもは何がリンゴなのかを適切に理解してしまいます。［Ⅰ］

しかも子どもは、「リンゴ」という名前が、眼前に示された物体の固有名ではなく、他のリンゴも

「リンゴ」と呼ばれるのだということも理解します。これは、子どもが「名前で呼ばれるべきもの」がどんなものなのかをあらかじめ知っていると考えるほかないでしょう。 Ⅱ

そもそも子どもは「物には名前がある」ということも自分で理解しなくてはなりません。たとえば、チンパンジーのような人間に極めて近いと考えられている動物でさえ、物を見せてその名前を呼ぶような教え方では決して言葉を学びません。チンパンジーには、物には名前があるということがわからないのです。しかし、物には名前があるということを、どのようにしたら教えることができるでしょうか。 Ⅲ

このように考えると、言語を学ぶためには、言語とは何なのかについての知識があらかじめ子どもの側に備わっていなくてはならないはずです。「物には名前がある」とか「名前は種類を示す」とか、さらには「個体識別することが重要なものについては固有名詞がある」「行為や動作を示す言葉（動詞）もある」「文章は語順によって意味がまったく変わってしまうことがある」といったことを、子どもの側があらかじめ知っているからこそ、子どもは短い期間で言語を獲得することができるのです。 Ⅳ

このように、言語を学ぶためには経験だけでなく、前提となる知識が必要だというチョムスキーの主張はもっともなので、現在の言語学では定説の一つとなっています。 Ⅴ

もちろん、 C について(c)ロンソウがあります。たとえば、「子どもはリンゴが何かをあらかじめ知っている」というのは、あきらかに無理のある主張です。この世界にある、名前で呼ばれるべきものがすべて人間の遺伝子に書き込まれているわけがありません。他方、もう少し一般的な能力、たとえば物体を識別し、その類似性を判断する能力なら、遺伝的だといってよいかもしれません。

いずれにせよ、言語は単に経験のみによって学ばれるのではなく、人間の生得的な要素が関わっていることは、まず間違いないでしょう。

言うまでもなく、感覚器官を含む人間の身体は遺伝子によって形作られます。目や脳の構造の基本的な部分は人間という生物種において大体みな同じです。生きていくために必要なものへの欲求も、みな同じでしょう。(2)人間が世界について持つ認識は、そうした身体構造や欲求を前提として、世界との関わりあいによって作り上げられていきます。

生まれたばかりの赤ちゃんは、目もよく見えず身体も十分に動かせません。それでも辺りを見回して、お母さんやお父さんの顔を見つけだし、そちらを見つめます。いくつかの心理学実験から、生まれたばかりの赤ちゃんでも「顔」を認識して、好んで見ることが明らかになっています。そして、おっぱいや哺乳瓶をくわえてミルクを飲みます。

しばらくして視力が向上し身体も動かせるようになってくると、身の回りのものを手に取っていじったり口に入れたりして、それがどんなものなのかを理解しようとします。それは同時に、自分の身体を動かすことに慣れていくことでもあります。そして、形や色や、周りの人がそれをどのように使っているかといった用途によって、身の回りのものを分類します。物体までの(d)キョリを知覚したり、自分で動かせそうかどうかを見積もったり、次にどのようになるかを予測したりできるようになります。

赤ちゃんは、個人差はあるもののおおむね一歳前後から言葉を発するようになりますが、そのころには自分なりに身の回りのものについて理解しています。人間は、言語を獲得して他者との相互理解の世界に入る前に、まずは自分一人の世界を作り上げるのです。そうした理解は、自分一人で作り上げたものではありますが、人間の感覚器官や身体の構造や欲求に対応するものなので、おおむねみな同じになります。それゆえに、私がリンゴを示しつつ「これはリンゴだよ」というだけで、赤ちゃんは何がリンゴなのかを理解できるのです。

このような基本的な世界理解は、赤ちゃんが誰にも教えられることなく実行するものですから、人類普遍だといって間違いないと思います。それゆえに、たとえば日本語を学習中の、リンゴが採れない国の人にリンゴを見せて、「これはリンゴです」と教えたら、私たちと同じように「リンゴ」を知覚して、「リンゴがこの物体の名前であり、この物体はリンゴという種類に属しているのだ」と理解するでしょう。

このように考えてくると、人間の認識は言語によって「何でもあり」に変化するものではなく、人類共通の身体構造や欲求による制限を受けているといえるでしょう。先ほど色の見え方について使った言葉でいえば、(3)言語には物理学的必然性はないが、生物学的必然性はあるのです。

もちろん、このように言ったからといって、すべての言語において名前で呼ばれるものがみな同じということではありません。ソシュールについて説明したところで、英語の「put on」が日本語では「かぶる」「着る」「はく」をひとまとめにしたような意味であることを例として挙げました。このように言語が違うと言葉の意味の範囲が異なるのですが、それにもかかわらず、私たちにとっても「put on」が「かぶる」「着る」「はく」をひっくるめた意味であることにはそれほどの違和感はありません。それらが「(e)ボウシや服や靴などを」身に着ける」という「同じ動作」として分類可能であることは十分に理解できますし、私たちは英語を学ぶこともできます。

しかし、(4)もしも「かぶる」と「飛ぶ」と「眠る」を同じ言葉で表すような（つまり、それらを「同じ動作」として分類するような）言語が存在するとすれば、私たちはそれを理解したり使いこなしたりすることは、おそらくできないでしょう。要するに、言葉の意味の多様性は人間にとって理解可能な範囲内にとどまるということです。「言葉の意味は言語それぞれ」というほどには、言語は異なっていないのです。

（山口裕之『「みんな違ってみんないい」のか？　相対主義と普遍主義の問題』）

（注）ソシュールの恣意性の理論……ソシュールは、スイスの言語学者（一八五七～一九一三）。ここでの「恣意性」は「必然性がないこと」という意味。ソシュールは、言葉の音声とその指し示す対象との結びつきに必然性はなく、社会的な約束にすぎないと主張した。後述の「言語は恣意的だという考え方」も、これを踏まえている。

問1　傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、(a) 1 、(b) 2 、(c) 3 、(d) 4 、(e) 5 。

(a) シュッパン　1

① 展示品のハンニュウに立ち会う。
② 強国が武力で次々とハントを広げる。
③ 新商品のハンバイに力を入れる。
④ 本文中の記号の見方をハンレイで示す。
⑤ 経緯を説明した文書を広くハンプする。

(b) トナえて　2

① 会社からのショウヨをあてにする。
② このところフショウジが続発している。
③ 逃げ出したいショウドウにかられる。
④ 各国を歴訪して軍縮をテイショウした。
⑤ 日程を主催者にショウカイする。

(c) ロンソウ　3

① 機銃をいっせいにソウシャする。
② 脱文した一文をソウニュウする。
③ ジュウソウは多くの料理に使われる。
④ 行方不明者のソウサクが行われる。
⑤ 労働ソウギがしばしば起こった。

(d) キョリ　4

① カンリの登用試験を受ける。
② ノウリにかすかな不安がよぎった。
③ 身勝手な言動が人心のリハンを招く。
④ バンリの長城を思い浮かべる。
⑤ 契約をリコウするために努力する。

(e) ボウシ　5

① アイボウのおかげで仕事がはかどる。
② 夜更かししたためにネボウした。
③ ボウエキフウについて学習する。
④ ボウオンの徒である彼は非難された。
⑤ 夏の外出にはチャクボウを薦める。

問2　空欄 A ・ B に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、6 。

① A＝徹底的　B＝体験的
② A＝根本的　B＝論理的
③ A＝限定的　B＝主体的
④ A＝発展的　B＝究極的
⑤ A＝部分的　B＝原理的

問3　傍線部(1)「そのとき子どもは、何がリンゴという名前で呼ばれているのかを自分で理解しなくてはなりません。」とあるが、このことについて筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、7 。

① 子どもが言葉を理解するためには他者から教えられるという経験を重ねる必要があるが、それだけでは不十分で、言語についての知識も同時に身につけていく必要がある。
② 子どもはほとんど経験に頼ることなく言葉と物の関係を理解することができるが、その結果として世界には「名前で呼ばれるべきもの」があるという知識も得ることができる。
③ 子どもは一度の経験で言葉と物の関係を理解することができるが、そのためにはあらかじめ「物には名前がある」という知識を経験によって身につけておくことが必要である。
④ 子どもは多くの経験を重ねなくても言葉と物の関係を理解することができるが、それは子どもが言語とは何かについて、あらかじめ一定の知識を持っているからである。
⑤ 子どもは経験に頼らずに言葉と物の関係を理解するように見えるが、実際に言語を話せるようになるまでにはやはり経験が必要であるから、言語の習得を本能に帰することはできない。

問4　空欄 ア ・ イ に入る最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、ア 8 、イ 9 。

ア 8
① もちろん　② なぜなら　③ しかし
④ そのうえ　⑤ なるほど

イ 9
① あるいは　② すなわち　③ だから
④ けれども　⑤ ちなみに

問5　次の文は本文の一部である。どこに入れるのが最も適当か。本文中の［Ⅰ］～［Ⅴ］の中から一つ選びなさい。解答番号は、［10］。

これは、名前を教えること自体の前提ですから、単に名前を教えることによって教えることはできないのです。

① ［Ⅰ］
② ［Ⅱ］
③ ［Ⅲ］
④ ［Ⅳ］
⑤ ［Ⅴ］

問6　空欄［C］に入る最も適当な言葉を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、［11］。

① その前提となる知識のうち、具体的にどこまでが遺伝的なもので、どこからが環境的なものであるのかといった点
② その前提となる知識のうち、どこまでが人類すべてに共通するもので、どこからが個人的なものなのかといった点
③ その前提となる知識が具体的にどのような知識で、どのような形で言語的に獲得されるのかといった点
④ その前提となる知識と言語の習得の間に、遺伝子に書き込まれない情報がどの程度混在しているのかといった点
⑤ その前提となる知識が具体的にどのような知識で、どのような形で遺伝子に書き込まれているのかといった点

問7　傍線部(2)「人間が世界について持つ認識は、そうした身体構造や欲求を前提として、世界との関わりあいによって作り上げられていきます。」とあるが、このことについて筆者はどのように論じているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、12。

① この過程を、本文の「生まれたばかりの赤ちゃんは……」の段落で具体的に説明し、言語が個人の特殊性を帯びることの根拠としている。

② この過程を、本文の「生まれたばかりの赤ちゃんは……」から次の段落で具体的に説明し、言語が人類に固有のものであることの根拠としている。

③ この過程を、本文の「生まれたばかりの赤ちゃんは……」からの三段落で具体的に説明し、言語に人類共通の普遍性が存在することの根拠としている。

④ この過程を、本文の「生まれたばかりの赤ちゃんは……」から次の段落で具体的に説明し、言語の習得に個人差があることの根拠としている。

⑤ この過程を、本文の「生まれたばかりの赤ちゃんは……」からの三段落で具体的に説明し、言語が他者との相互理解に役立つことの根拠としている。

問8　傍線部(3)「言語には物理学的必然性はないが、生物学的必然性はあるのです」とあるが、「言語」に「生物学的必然性」があるとは、どういうことか。本文冒頭にある虹の色の話に即し、「言語化」という言葉を用いて、四十字以内で説明しなさい。解答番号は、13。

問9　傍線部(4)「もしも『かぶる』と『飛ぶ』と『眠る』を同じ言葉で表すような……言語が存在するとすれば、私たちはそれを理解したり使いこなしたりすることは、おそらくできないでしょう」とあるが、このことについて筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、14 。

① こうした言語を私たちが理解したり使いこなしたりできないのは、「かぶる」「飛ぶ」「眠る」を同じ動作・行為として分類することが日本人には不可能だからであり、そのことが異なる言語間に越えられない壁があることを示している。

② こうした言語を私たちが理解したり使いこなしたりできないのは、「かぶる」「飛ぶ」「眠る」を同じ動作・行為として分類することが日本人にとって違和感のあることだからであり、そのことが日本語に独自の感性が備わっていることを立証している。

③ こうした言語を私たちが理解したり使いこなしたりできないのは、「かぶる」「飛ぶ」「眠る」を同じ動作・行為として分類することが人類には不可能だからであり、そのことが言語による表現力に一定の限界があることを立証している。

④ こうした言語を私たちが理解したり使いこなしたりできないのは、「かぶる」「飛ぶ」「眠る」を同じ動作・行為として分類することが人類には不可能だからであり、そのことがこうした言語が実際には存在しえないことを立証している。

⑤ こうした言語を私たちが理解したり使いこなしたりできないのは、「かぶる」「飛ぶ」「眠る」を同じ動作・行為として分類することが多くの人には不可能だからであり、そのことがこうした言語には他の言語にない特殊性があることを立証している。

問10　本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、15 。

① 言語は恣意的だというソシュールの考え方を批判したチョムスキーは、言語は人間の生まれつきの本能であり、人間が経験だけで物の名前を学ぶことは不可能であると主張した。

② 子どもが物の名前を経験だけで学ぶと仮定したら、物を見せてその名前を呼んだとき、その名前が目に映る多くの物のうちのどれを指しているかを決定することの困難を回避できる。

③ チンパンジーがどのような方法によっても言葉を学ぶことができないのは、「物には名前がある」「名前は種類を示す」といった知識が生得的に備わっていないからである。

④ 子どもは、物の名前を習得する以前の段階で自分一人の世界を作り上げているが、その世界はその子ども独特の感覚器官や身体の構造や欲求に根差した個性的なものである。

⑤ リンゴを見たことのない外国人に「リンゴという言葉」と「リンゴという物」との関係を教えることができるのは、人類の基本的な世界理解の仕方に共通性があるからである。

問題Ⅱ　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「和魂洋才」(注1)のいいとこ取りの精神は、奇妙な陰影を生んだ。そしてそれが結果として、「サブカル」というジャンルを生み、「オタク」を世界語にまでさせた原動力なのかもしれないと言ったら、驚かれるだろうか。

文化立国といえば、この国では、かつてはフランスを思い浮かべるのが一般的だった。近年ではグローバル化のなかで、国内の分断も叫ばれ、以前とは少々異なる状況にあるフランスだが、そこには「文化」もまた「政治」的に使うことを意識させるような戦略性があった。

「華の都」パリは、大いなるイメージ戦略の努力で維持されていたものだったといえる。さらにそこには、政治と、それに対する批評の文化という、緊張関係があるのだ。

「フランス的中庸」という言葉があるが、それは単に、足して二で割ったような平均のことではない。伝統と革新が、政治の論理と文化の論理が、つねに水面下でせめぎ合うような、緊張感を孕(はら)んだものだったのである。それは、日本にはない力の均衡だ。

一方、この日本にあっては、そもそも、「文化」というものが、「政治」「経済」などが当然のごとく重要視された後で、添え物として末席に置かれるような状況が続き、さらに、「文化」という言葉に、「音楽」「美術」「文学」などの既成のジャンルを当てはめるのみで終了してしまうという時代が長らく続いていたといわざるをえない。

そうした、ともすればお行儀よくおさまりがちな文化状況の捉え方に対して、そんなことはない、「サブカルチャー」も重要視されている、クールジャパンの原動力ではないか？　とおっしゃる方もいることだろう。しかし、「メインカルチャー」に対する「サブカルチャー」とジャンル分けをしている時点で、ある種の「制度的」な思考に陥ってしまうのは、じつに残念なことだと思う。

「文化」のダイナミズムとは、むしろ「メインカルチャー」「サブカルチャー」というような、安易な分類を拒む精神のなかにこそある。現状を常に相対化するツールこそが「文化」だと、新たな定義を与え直すところから始めた方がよいのかもしれない。その作品を味わうことを通して、自らの立ち位置を、時に確認、時に懐疑する……いずれにせよ、自らの存在、価値観に揺さぶりをかけられることこそが、芸術作品の重要な存在意義なのだ。

二〇世紀を代表する美術評論家クレメント・グリーンバーグ(注2)は、これを「(1)主体の分裂」と明晰(めいせき)に定義している。つまり、理性による論理的な理解とは矛盾し、理性でわかることを超えて、存在として心が揺れる、ある種の分裂を抱えるものこそが芸術だというのだ。

なぜ、ここに僕が危惧を抱くのか？　日本の場合、この「分裂」の緊張感がないままに、手段がいつの間にか目的化してしまい、そこに猛進する社会だからだ。そしてその結果が、ジャンル化された「サブカル」というタコツボを生んでしまっているとしたら、少々残念なことだと思うのだ。

こうした「サブカル」礼賛の一方で、「人文系」といわれる学問分野に風当たりが強くなったのも皮肉な気がする。

自然を相手にする「自然科学」に対して、人間や、人間の所産を扱う「人文系」は、客観性、実効

性などにおいて、どうしても旗色が悪いイメージがある。ＩＴ化が進み、なにごとも、ビッグデータ、科学としてのエビデンス、証拠となるデータなどが真理を語る時代に、どうも「使えない」「役に立たない」というわけらしい。

なるほど確かに、「更新」されていかない「人文系」、十年一日のごとく同じテキストをただ読み上げるような哲学の(a)コウギがあったとしたら、「ムダ」と烙印を押されてもいたしかたないのかもしれない。

だが、そこで、少し立ち止まって考えたいのだ。その「ムダ」と宣告をする人は、逆に「役に立つ」ということを、どう定義しているのだろうか？　あるいは、こう言い換えても良いのかもしれない。「役に立つ」のは、どこまでを(b)シャテイに入れて考えたうえで生まれた判断なのだろうか？

歴史を大きな文明論的なフレームで見れば、科学技術の輝かしい成果で問題を解決し、切り開いてきた時代があったことは疑いようがない。一八世紀イギリスに始まる産業革命は、世界へと広がり、二〇世紀の工業化社会が世界を覆い、その果実のおかげで、二一世紀の現代社会の繁栄があるのも確かだ。さまざまな移動の時間、情報のコストなど、すべてが大幅に短縮され、「豊か」で「便利」な世の中が生まれたことは否定すべくもない。

しかし、(2)人間の思考、心、感情は、そうした大変化に追いつくような更新を果たしたといえるだろうか？　科学技術が可能にした革命的なスピードに疲れを感じる人々も生まれ、「降りたい」と無意識で願う人々も少なからずいるように思う。さらにいえば、「降りたい」のに「降りられない」というジレンマに苦しむ人々も増えているように感じられる。

「やめられない」「止まらない」資本主義の性質が、技術の発達、革新的なイノベーションを後押しして行き着いた現代社会。そこにはもちろん可能性もあるが、限界もあるわけで、こうした発想が『欲望の資本主義』(注3)という番組へと結びついた。(3)「可能性」と「限界」とが、常に併存していることを認識する必要がある。

ムダでしかないのかもしれない人間という存在と、ムダの(c)シュウセキである人生という代物の本質を考えてみることは、決してムダではない。

たとえば、「一周遅れのトップランナー」という表現がある。普通は、時代遅れとしてネガティブな意味で使われるこの言葉も、繰り返す歴史の波を考えれば、そこに肯定的な意味も見出せるかもしれない。六〇年代風のファッションが、七〇年代風のデザインが、八〇年代風のスタイルが……、その後九〇年代に、ゼロ年代に、そこに少しだけ時代を潜り抜けたテイストが加味されて、新たな(d)イショウとなってよみがえったかに思える現象に、幾度となく出会った。

さらに、日本という、ねじれを抱えつつ、同時に長い歴史を持つ国であればこそ、なおさら考えてみるべき言葉だともいえる。いたずらに「変えること」「改革」「変化」ばかりに目が行き、飛び付いてしまうことで、守るべき良質なものを失ってよいのか？　そこは丁寧に見極めなければならない。

(4)本当に目指されるべき新しさとは、なんだろうか。

「ほしいものが、ほしいわ。」

これは、一九八八年、バブル最盛期の西武百貨店のコピー。糸井重里(注4)さんによる、一連の名作コ

ピーのひとつだ。それになぞらえれば、現代は、さしずめ、

「　　A　　」

ということになるのだろうか。お客様本位の時代、マーケティングによって、視聴者の方々が「見たい」ものをしっかり把握し、番組化してお届けする。もちろん、それは大事な基本かもしれない。

しかし同時に、その「見たい」という論理ばかりが表層の理解で優先されることに、危ないものを感じる。「視聴者本位」が叫ばれるほどに、なんとも複雑な想いに駆られるのはそのせいだ。

見る人が「見たい」というもの、「見たい」と言葉にするものは、本当に「見たい」ものなのか？近年のネットによるビッグデータによるマーケティング調査にケチをつける気など毛頭ないが、その背後にあるものを読み取り、考え続けなければ、本質を見失い、表層のみの分析に留まるマーケティングの論理は、X形骸化していくだろう。

映像の大きな魅力のひとつは、「Y図らずも」映し出してしまうことにもある。つまり、撮る側も見る側も自覚できていないことが伝わるダイナミズムというものがあるのだ。その意義まで(e)カクチョウして考えると、時に映像を送りだす側すら、最終的なすべてを把握しきれていないままに、表現はなされるのである。

当然のことながら、番組の狙い、テーマ、対象はもちろんある。だが逆説的にいえば、［ア］が気づいてもいないものを、勝手に［イ］の方が発見する可能性に対して、いつも心していなければならない。そしてその時、［ウ］がまたその反応によって発見させられる。「図らずも伝わる」という現象にある豊かさにこそ、注目すべきなのかもしれない。

すべてを繰り返しのサイクルと捉える。そうした発想に立つ時、あらゆるフィールドが活性化し、「新しさ」も発見できる。たとえば、人文系の学問、「文学」なら「文学」というものも、閉じるのではなく、むしろ、あらゆる領域を「文学」として読み解き、過去の膨大な作品の実験の歴史まで視野に入れた時、可能性が広がる。

その時、「文学という方法」は、AIと共に歩む実践的な学となるのかもしれない。どちらも共に、人間とは何か？　その本質を追究する精神に支えられた学問分野だからだ。

（丸山俊一『結論は出さなくていい』　出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

（注1）和魂洋才……日本の古くからある精神を大切にしながら、西洋の文化を取り入れ、調和、発展させること。

（注2）クレメント・グリーンバーグ……アメリカ合衆国の美術評論家（一九〇九～一九九四）。

（注3）『欲望の資本主義』という番組……NHKのドキュメンタリー番組。

（注4）糸井重里……日本のコピーライター（一九四八～　）。

問1　傍線部(a)〜(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、(a) 16 、(b) 17 、(c) 18 、(d) 19 、(e) 20 。

(a) コウギ　16

① ソッコウにたまっていた泥を片付ける。
② 彼のイコウを整理する作業を開始した。
③ 発表が終わり先生からのコウヒョウがあった。
④ 車の月刊誌を定期コウドクしている。
⑤ 放課後にコウテイでサッカーをする。

(b) シャテイ　17

① 目の前にある急なシャメンを登る。
② 彼は支持者に対してチンシャした。
③ 情報をシャダンされて決定できない。
④ シュシャ選択して最善の策を決めた。
⑤ 妹はチュウシャをとても嫌がる。

(c) シュウセキ　18

① 彼はこの問題のセキニンを取って辞職した。
② 私の家にはお正月にシンセキが集まる。
③ 訳もなく相手をハイセキしてはならない。
④ 弟は日頃の不満がウッセキしている。
⑤ コセキ謄本を役所で受け取る。

(d) イショウ　19

① 現代社会へのケイショウを鳴らす。
② おいしい料理のごショウバンにあずかる。
③ 早寝早起きの習慣をショウレイする。
④ 日本画家のキョショウの作品を鑑賞する。
⑤ 国家の安全ホショウについて考える。

(e) カクチョウ　20

① 犯人にカクセイキで投降を呼びかける。
② 彼はプロになったことでトウカクを現した。
③ 三十分カンカクで入場が許可されている。
④ 相手をイカクするように大声を上げた。
⑤ 人民を守るためにジョウカクを張り巡らす。

問2　本文における「日本」という国の説明として**適当でないもの**を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、21。

①　「政治」を批評するものが「文化」であると考え、「文化」を意識して用いている国。
②　「フランス的中庸」という言葉は存在しない、「政治」と「文化」が均衡でない国。
③　「政治」「経済」などを重要視しており、「文化」は二の次であった国。
④　「音楽」「美術」「文学」などの既成のジャンルを「文化」だと捉えていた国。
⑤　「サブカルチャー」を「メインカルチャー」に対するものとしてジャンル分けをする国。

問3　傍線部(1)「主体の分裂」とあるが、これはどういうことを表しているか。四十字以内で説明しなさい。解答番号は、22。

問4　傍線部(2)「人間の思考、心、感情は、そうした大変化に追いつくような更新を果たした」とあるが、ここでの「更新」とはどういうことを表しているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、23。

①　客観性や実効性を証明することができないこと。
②　データからわかる真理を懐疑的に捉えること。
③　「役に立つ」という定義には合わないこと。
④　現代社会の繁栄に合わせて変わったこと。
⑤　「ムダ」という烙印を押されたこと。

問5　傍線部(3)「『可能性』と『限界』」とあるが、どのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、24。

①　「役に立つ」ものが現れる可能性と、その現れたものを「役に立つ」ものとして定義することへの限界。
②　産業革命から始まった現代社会の繁栄の可能性と、その繁栄が全世界へと広がるスピードの限界。
③　二〇世紀の工業化社会の発展の可能性と、その発展についていけないと自覚した人間による思考、心、感情の限界。
④　「豊か」で「便利」な世の中になる可能性と、世の中の「豊かさ」や「便利さ」を証明することの限界。
⑤　科学技術によって文明が発展していく可能性と、その発展に疲れなどを感じる人々が抱える考えや気持ちの限界。

問6　傍線部(4)「本当に目指されるべき新しさとは、なんだろうか。」とあるが、筆者の考える「新しさ」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、25。

① 「使えない」「役に立たない」ことを「ムダ」として省くことで生まれるもの。
② すべてを変えることで手に入れることができる「豊か」で「便利」なもの。
③ 長い歴史を持つ国であることに思いをはせ、人間の欲望を実現することで生まれるもの。
④ すべてが繰り返しのサイクルであると捉えることにより発見できるもの。
⑤ AIと共に歩むことにより、人間の本質を追究する姿勢から生まれるもの。

問7　空欄 A に入る最も適当な言葉を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、26。

① 見たいものしか、見ないわ。
② 見たいものが、見たいわ。
③ 見たいものが、ほしいものだわ。
④ 見たものすべてが、ほしいわ。
⑤ ほしいものが、見たいわ。

問8　傍線部X「形骸化」・Y「図らずも」の本文における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、X 27、Y 28。

X　形骸化　27

① 形が変わらないこと。
② 内容が変化していくこと。
③ 内容がなく形だけのこと。
④ すべてがなくなってしまうこと。
⑤ まねをすること。

Y　図らずも　28

① 少なからず
② 必ず
③ 計画的に
④ 意識的に
⑤ 思いがけず

問9　空欄［ア］～［ウ］に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、［29］。

① ア＝視聴者　イ＝作り手　ウ＝視聴者
② ア＝作り手　イ＝視聴者　ウ＝作り手
③ ア＝作り手　イ＝作り手　ウ＝視聴者
④ ア＝視聴者　イ＝作り手　ウ＝作り手
⑤ ア＝作り手　イ＝視聴者　ウ＝視聴者

問10　本文の内容に**合致しないもの**を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、［30］。

① 筆者は、世界の人々が「和魂洋才」の精神を持ったことで、「オタク」が世界で通用する言葉になったと指摘している。
② 筆者は、「『華の都』パリ」という表現をイメージ戦略の一環としながら、政治とその批評の文化という関係をも見出している。
③ 筆者は、一般にはネガティブな意味で使われる「一周遅れのトッププランナー」という表現を、肯定的な意味で捉えようとしている。
④ 筆者は、現代の「視聴者本位」の傾向を重要であると認識しながらも、そればかりが重視されることに危惧を感じている。
⑤ 筆者は、文学もＡＩも人間の本質を追究する学問であるから、それらは共に実践的な学問になる可能性があると考えている。

国語（20231119）　解答一覧

大問	小問	解答番号	正解
Ⅰ	問 1	1	②
		2	④
		3	⑤
		4	③
		5	⑤
	問 2	6	②
	問 3	7	④
	問 4	8	③
		9	①
	問 5	10	③
	問 6	11	⑤
	問 7	12	③
	問 8	13	記述問題
	問 9	14	④
	問 10	15	⑤
Ⅱ	問 1	16	③
		17	⑤
		18	④
		19	④
		20	①
	問 2	21	①
	問 3	22	記述問題
	問 4	23	④
	問 5	24	⑤
	問 6	25	④
	問 7	26	②
	問 8	27	③
		28	⑤
	問 9	29	②
	問 10	30	①